8 世紀に最初建立された宇佐神宮(1800 年代後半まで宇佐八幡として知られていた) は元が神道の神社と仏教の寺を含む宗教的複合施設の一部であった。施設は仏教の弥勒寺によって管理されていた。それは国東半島の八幡神崇拝を中心として広がっている宗教上の地域社会の長であった。今の神社は，日本で最も広く崇拝されている神々の一体である八幡に捧げられた最初の神社と同じ山に位置している。実際，19 世紀後半の明治政府により可決された宗教分離法（神仏判然令？）ができるまで近代の宇佐神宮というのは融合的宗教の崇拝の場所であった。弥勒寺・宇佐神宮という複合施設はまた，現在大分県となっている地の政治的権力の中心であった。元々は日本中の何千もの宗教的敷地の長であったが，政治支配が九州から本州に移った鎌倉時代に政治的権力を失ってしまった。宇佐神宮の 1300 年の歴史は日本の神道と仏教の複雑な関係を示している。

神道が日本固有の霊魂崇拝の宗教であるのに対して，仏教は西暦 6 世紀の初期に我が国にもたらされたものである。当時は仏教の教えは神道として知られるようになっている土着の伝統と組み合わされていた。この融合主義の形態の一つが修験道であった。修験道が九州北部で広まり宇佐神宮のような場所と結びつけられると，神宮寺もまたその地域中に広まり，そこでは今日の学校に似た役割を果たしていた。それらは結びついた宗教の実践の空間であった。そしてその結びつきはまた建築に於いても表現された。例えば，これらの敷地の多くには神道の鳥居と仏教の門の両方があった。この結びついた実践は，仏教と神道が政府によって強制的に分離させられた 19 世紀中頃に終わりを告げることになった。神宮寺いう複合施設は解体され，宇佐神宮として知られるようになった。ここで行われる宗教的儀式は戦後になるまで排他的に神道のものとなっていた。